ISSN 0388-5569
VOL. 19 No. 3
(通巻57号)
1998. 12

Library News

山口大学附属図書館報

目次

電子情報対策と損得勘定 …… 1
ライブラリアンとしての半生 …… 4
空想から現実への旅 …… 5
読書が苦手な人達へ …… 6
電子図書館 ー工学部分館の現状ー …… 8
本学関係教官寄贈図書 …… 8
トピックス …… 9
人事異動 …… 10
日誌 …… 10

電子情報対策と損得勘定

工学部応用化学工学科助教授
赤田倫治

はじめに

私は工学部の図書委員であり、電子情報対策ワーキングと呼ぶグループにも所属しています。図書委員で組織されるこの小さなグループは工学部の電子情報化をどのように進めるかを相談するグループです。私は、コンピュータの専門家でもなく、単なるユーザーですので、ここではコンピュータや電子情報化との個人的なつきあいとその経験から近未来を想像し、コンピューターをあまり好きじゃない人間がいかにして電子情報化とつきあっていくかを紹介してみたいと思います。

コンピュータ　いやよいやよで　使いだす

私の中では、昔、コンピュータは計算機でした。ポケコンと呼ばれる電卓に関数機能が付いたものをコンピュータのようにイメージしていました。計算が元々苦手でしたので計算機＝嫌いという式になったのかもしれません。現在のコンピュータからイメージすれば元祖はタイプライターかもしれません。学生時代、私たちが打っていたのは手動のタイプライターでした。字体も変えられるあこがれのIBMのボール式電動タイプで論文を打ったときは感激したものでした。しかし、打ち終わった後に間違いを見つけたとき、さてどう打ち直そうかとため息をついていた、と書いてわかる学生はもはやいないでしょう。

その後、大学院時代にはワープロというものが登場しました。これは、記憶できることと日本語もできることが何といっても素晴らしく、いちいち打ち直す必要もなく、画面をみて直せば、それが印刷できます。変換、書き込み、削除、コピー、保存などなど、ワープロは凄いと思っていたころさえ今や昔となってしまいました。

広大な　世界へ羽ばたく　コンピュータ

そのころ、アメリカの研究者へ遺伝子サンプルのDNAを請求し、そこからサンプルと手紙が戻ってきました。その手紙は驚くほどきれいな文字が印刷されていました。True type fontというものかと今は思いますが、ドットでプリントアウトしていた我々にはみたこともない美しさでした。それから私はそのアメリカに行く機会を得ました。アメリカの研究室ではみんな論文用の図などをコンピュータの簡単な操作で早くきれいに描いているではありませんか。驚くと同時に必要性を確信するが早いか、大学のディスカウントコーナーで1500ドルの破格の値段（当時はそう思った）でMAC Classic　を買ったのでした。それからの私は、

コンピュータの日々の進歩と遅れないぐらいのペースで一緒に歩き始めたのでした。アメリカの研究室では、当時研究に必要だった遺伝子配列のデータベースにアクセスすることも学びました。取得した遺伝子が新しいかどうかおもしろいかどうかを知るためには必須の操作でした。操作を意味も分からぬままメモし、それを忠実にタイプしたりクリックさえすれば広大な配列データの世界へ旅立てるのです。これは凄いことでした。

後もどり　だれもがしない　コンピュータ

日本にわざわざ持ち帰ったMAC Classicはすぐに能力的に使えなくなりました。なぜクラシックという名がついていたかわかる気がします。そこで、ノート型のPowerbook 145B（18万円）を買い、1年後にはデスクトップ型のPerforma 512（24万円）を、その2年後にはPerforma 588（何と8万円）、そして、今はPower Mac 7300/180を使っています。コンピュータの進歩が恐ろしいほど早いせいで、一世代前の機種が安くもなりますが、使いものにもならなくなります。今では写真もコンピュータに保存し印刷していますので、古い機種での仕事はもう不可能です。研究にもよりますが、字を書き、図を描き、保存や発表するデータを持つ人はたぶん同じような歴史を持っているのではないでしょうか。コンピュータの歩みについていく毎日はここ数年は続くのでしょう。

学生に　聞いたらわかる　コンピュータ

そんなある日、インターネットへの接続途中で問題が発生し、コンピュータが壊れたことがありました。コンピュータの中身を知らない私は直すこともできず、途方に暮れました。考えられるだけのつてを使って聞いてもわかりません。最後は近くの専門家の（私にはそう思える）人を呼んできていじってもらっても結局ダメで、すべてのソフトウェアとファイルを入れ直しました。なんと無駄な時間かとは思いましたが、コンピュータの恐ろしさも実感しました。保存システムの強化や信頼できるコンピュータマニアが近くにいることが大事です。誰って？私の隣の机の宮本君です。大抵のことなら彼に聞いて解決しています。

コンピュータ　世界は一つの　ネットワーク

さて、このような発展をみせたコンピュータがこれからどんな仕事をしてくれるのでしょうか。コンピュータは今やネットワークでつながれています。最近でも、英語論文を書いてアメリカの知り合いに送りましたが、マイクロソフトワードというソフトウェアで書いた文章をe-mailで送ればそのまま（少し変でしたが）の体裁での文章をみることができます。知り合いが同じソフトウェアを持っているせいですが、それを適当に打ち直してe-mailで送り返してくれました。こうなってくると他の人との情報交換には同一レベルのコンピュータ環境が必要になります。したがって、コンピュータ環境を整備することも研究の基礎技術の一つかもしれません。

情報化　みんなでやれば　安くなる

さて、コンピュータとのつきあいは私の研究分野に限ってのことではないでしょう。コンピュータは事務処理にも威力を発揮します。最近はe-mailにより事務連絡が頻繁に入るようになりました。e-mailではコンピュータ上に作成した連絡文書をメイルアドレス（全員分）に送れば（つまり送信ボタンをクリックすれば）全教官に配布できるようになっています。もし、ある人が「私は紙が好きだ」と言った場合、その人のために事務の人はコンピュータの文書をプリントアウトし、コピーし、連絡用の封筒に入れて、各学科事務室のボックスへ入れ、別の事務の人がそれを持っていき、教官のボックスへ入れ、または、回覧用の紙をはり、連絡が回っているかどうかを毎日確かめ、誰まで回覧板が回ったのかを心配し、「先生、あれ見ました？」って聞いて回るかもしれません。これは、e-mailを受け取ることのできる人には必要のない仕事です。情報化は経費削減と仕事の効率化につながるという訳です。より安くより便利にするためには情報化はみんなで進める必要があると思います。

情報化　データを積んで　効率化

情報化による経費削減策をいくつか紹介します。それが、図書館の人たちや私たちが取り組んでいる図書の情報化です。図書は情報の宝庫です。

どのようにしたら少ない予算で効率よい情報の発信と受信ができるかが課題です。

まず、成功例として文献複写サービスの依頼連絡システムがあります。工学部図書分館のホームページを開き「文献複写依頼」をクリックすると文献複写依頼の入力欄が現れます。これに記入し、「図書館へ送信する」をクリックすれば文献複写依頼が完了します。依頼書に手書きで記入する必要もなく、図書館へ持っていく手間もなく大変便利です。依頼すれば、e-mailに受け取った連絡が入るので、それが自分の記録ともなります。依頼を受ける図書館の方もコンピュータに打ち込まれた形式の複写依頼をコンピュータ上で扱うため間違いも少なく、処理も便利になったそうです。2、3年前から始まり、平成10年5月から10月までのデータを調べてみますと依頼件数の88%がこれを利用していました。予想外に多くの人が情報化に対応していることがわかります。これによって依頼件数のデータが簡単に作成できました（表1）。この表は必要な論文を自分のキャンパスの図書館で読めない率ともいえるでしょう。必要なジャーナルや本を研究にできる限り平等に割り当てることができるかどうか、その問いかけも簡単な統計データから考えることができます。情報化は、その手伝いをしてくれるはずです。

情報化　酸いも甘いも　エネルギー

他にも工学部研究報告のCD-ROM化や電子ジャーナル化も進めています。賛成、反対意見をやりとりしての模索中です。基本的に忘れてならないことは、少ない予算でも同じかそれ以上の情報を発信し、受信することです。印刷代を削減しつつ同等の情報を発信できるCD-ROMでの論文発表形式も有効な方法でしょう。どんなフォーマットで提出するかで出力時の体裁に差がでていますが、手書き原稿を投稿する人がいないのと同じような感覚で同一フォーマットでということも今後は必要になってくるのではないでしょうか。

電子ジャーナルとは仕事机のコンピュータで論文が読めるということです。これを便利と思うか思わないかはコンピュータとのつきあい方の差かもしれません。昔は私も暇な一日を図書館の関連ジャーナルすべてに目を通すことに使うのを楽しみの一つとしていました。もう、そんな暇もないし、関連ジャーナルもほとんどないのでコンピュータ上で文献検索データベースに入って検索したり、ジャーナルのホームページに入って最新（来月号まで出るところもある）の論文タイトルを読んで情報を受信しています。もう、図書館へ行かなくても大量のジャーナルを眺めることができるようになっています。本文まで読めるようになるのが電子ジャーナルです。電子ジャーナルでは同じ雑誌を本館と分館でそれぞれ購入する必要もなくなり、経費削減ともなります。いいことづくめと思いますが、いかがでしょうか。

損得も　勘定しつつ　情報化

便利さばかりを強調しましたが、プライバシーや○秘文書の安全性や保管の問題は今後の対策が必要かもしれません。しかし、はじめに申しましたように情報化やコンピュータの環境は後戻りのない世界でしょう。うまく対応すれば限られた予算内でも素晴らしい情報環境の構築ができ、教育や研究へ有効なサポート体制ができるはずです。学科や学部などの区分を取り払った個人と全体を考える取り組みが必要だと思います。

この文章を読んで頂き図書館の情報化でもお世話になっている工学部分館の宮田さんと岡田さんにお礼申し上げます。

表1．5月から10月までの文献複写依頼件数

学　科　名	依頼件数（%）
機械工学	214 (17)
応用化学工学	413 (32)
社会建設工学	96 (8)
電気電子工学	147 (11)
知能情報システム工学	89 (7)
機能材料工学	235 (18)
感性デザイン工学	80 (6)
共通講座	12 (1)
合　計	1286 (100)

ライブラリアンとしての半生

附属図書館工学部分館　情報サービス係長
吉　野　君　子

「われはものの数にもあらず深山木の道ふみわけし人ししのばゆ」この湯川秀樹博士直筆の色紙は、私が始めてライブラリアンとして足を踏み出した当時の工学部分館長故松山英太郎先生が、ある日、「同窓会があって湯川博士に書いて戴いた」と言われて図書館へ寄贈して下さったもので、今も工学部分館のブラウジングルームに掛けられ大切にされています。

まもなく山口大学を去る私にとって思い出は数々ありますが、つよく印象に残っているのは、やはりライブラリアンとしての出発を始めた昭和33年当時のことです。

同室の先輩方が少人数であったことから、分館長であった松山先生自らが書庫で雑誌の並べ替えをされるのをご一緒に手伝ったこと、宇部興産（株）から寄贈していただいた鉄筋コンクリートの書庫は夏はサウナ冬は冷蔵庫ではありましたが、充分ゆとりが有り、旧徳山海軍燃料廠より、外国学術雑誌等の貴重な専門書（約5,500冊）が関係者の努力により受贈されており、運び込まれたまま置かれてあった機械科棟内の仮図書室から毎日少しずつ自転車で運んでは整理をした事など。この資料は今も工学部分館の特殊資料として保存、閲覧に供されています。

当時は購入あるいは寄贈された書籍を整理し蔵書数を増やすことが第一の仕事であったと記憶しています。そのころ出版されたある小説に、「くたびれた図書館員風の男」と主人公のことを評しているのを読み、当たらずとも遠からじと苦笑したことを思いだします。昭和48年常盤団地施設整備の一環として、待望の新図書館が現場所に新築され移転しました。その後二階および西側の一部を増築して現在にいたっていますが、増築計画にあたって図書委員会で、ある図書委員の先生が「図書館はわれわれのシンボルであるから、立派なものを作ってほしい」と発言されたことが、今もうれしい助言として記憶に残っています。閲覧室中央に設けられた赤いジュータンの階段は、今日に至っても非常にユニークなものだと思っています。

新図書館に移転した頃から業務電算化に備えた学習会等が始まり、昭和56年度予算で情報処理センターの電算機更新が行われた際、附属図書館も共同利用の新システム構想で、その一員として参画することになり、翌年度始めから閲覧業務を開始しました。

これが今にいたる情報処理化時代への始まりで、まさに私のライブラリアン生活の半分に当たります。その後昭和60年より11年間医学部分館でお世話になりましたが、ここでの生活は私にとって非常に得難いものでした。各分館共にそれぞれの特色がありますが、医学部分館における日本医学図書館協会との繋がりは、私のみならず館員にライブラリアンとしての意識の昂揚をもたらし、全国の医学図書館同士の連携による学習および業務改善等は、非常に進んでいると感じました。また、図書館に対する利用者全体の意識も高く、打てば響く雰囲気は業務に対して意欲とやりがいを感じたものです。

今、情報処理化時代の真っただ中にあって、従来からの情報の収集、組織化、保存、提供という役割を通して利用者の勉学、教育、研究の向上を支援してきた図書館が、大きな変革を要求されています。

すなわち情報処理技術および機器の止まり無き進歩と、インターネット等のグローバルなネットワーク基盤の整備を駆使して、「いつでも、どこでも、誰でも、なんでも」という利用者のニーズに答えうる電子図書館システム化です。

具体的な例としては、すでに附属図書館で行っている24時間開館、分館で実施している文献複写依頼等の各種業務の研究室からネットワークを介してのorder、研究報告のインターネット上への掲載CD-ROM化のための実験、電子ジャーナルへの

取り組み、館内での学生各自持ち込みのノートパソコンの使用等です。

しかしながら、こうしてみると今までになかった新たな問題も発生しています。電子ジャーナルの出版形態及び契約に関しての標準的かつ確実な保証、また現在図書館で認められている著作権、翻訳権等のディジタル化時代への対応等、いずれの問題もこれはもはや自大学のみの問題ではなく、他大学の図書館と連携して国内及び国外の出版社等を対象として交渉し、より有効なものを確立してゆく必要があると思います。

今や、77歳の飛行士グレンさんや女性飛行士の向井千秋さんが宇宙で活躍する時代です。ネットワークだけでなく、業務を行う上でもグローバルに目を向けなければいけない時代となっていると言うことに、なんだか大変だけれども夢も大きいと、まもなく去ってゆく私には感慨ひとしおです。

現在、中四国の大学においてもいくつかの図書館が、情報処理センターの組織・機能を合わせもった施設として生まれ変わりつつあります。それは、その中で双方の分野の特徴を生かしつつ、あるものは同化させて行く、これは新しい時代のニーズにあった変革でありすばらしいことだと思います。そのとき図書館という名称は無くなるかも知れません。

しかしながら、電子図書館システムはその中にあっても、ディジタル化された情報だけを扱うのでは決してなく、従来型の図書館システムすなわち冊子体の資料も合わせ持ち、サービス提供して行くことは間違いありません。

標題に書かせていただいた「ライブラリアン」と言う呼び名で私は、自分を含め図書館員をそう呼ぶことが好きです。いかに時代が変わり図書館業務のノウハウが進化して行こうとも、今までに諸先輩がたによって培われてきたライブラリアンとしての使命は、忘れ去られる事はないと信じて筆をおきます。有り難うございました。

空想から現実への旅

工学部感性デザイン工学科３年
笠　原　利　和

『きらめきのゆきき　ひかりのめぐり　にじはゆらぎ　陽は織れど　かなし。
青ぞらはふるい　ひかりはくだけ　風のきしり　陽は織れど　かなし。

にじはなみだち　きらめきは織る　ひかりのおかの　このさびしさ。
こおりのそこの　めくらのさかな　ひかりのおかの　このさびしさ。
たそがれぐもの　さすらいの鳥　ひかりのおかの　このさびしさ。』

これは私が愛読している宮沢賢治の『十力の金剛石』の一節である。そもそも賢治が活動していた場は岩手県の盛岡で、近くに北上川が悠然と流れ、遠くに岩手山がそびえ立ち、北上の山々の窪んだ盆地には、豊かな水田が広がっているという、のどかで静かな地である。以前、ここを歩いた時、昔のありのままの心に戻ったような気がしたものだ。

私の生まれは新潟で、長年の間ここに住んでいた。近くに雄大な信濃川があり、目の前に、高々と剣のような鋭い山々が大地から伸び、黄金色の水田が見渡す限り続いているといった所で、冬ともなれば、背丈以上も積もる豪雪地帯でもある。このような環境から、岩手の盛岡には深い共感がある。そして、賢治の描いた上の一節は、まさに私が子供の時、遊びながら見た風景そのままなのである。もしかしたら、盛岡を歩いた時に抱いた感情は、ここに起源があったのかもしれない。そして、結びにある「このさびしさ」は、北国の人間が常に持っている「さびしさ」と同じなのかも

しれない。賢治の作品は、そのような子供の頃を思い出させて、また、奥州という地を想像させてくれるのだ。

私にとって奥州とは近いようで遠い存在であった。郷里から岩手、青森へはかなり遠い道のりで不便なのだ。それは日本海側は裏日本と言われ、東北は蝦夷と言われた所で、双方を結ぶ動線など全く重視されてなくて、幹線道路や鉄道が充実していないからである。だから、賢治の作品を触れる度に、奥州における空想を思い描いたものだ。

また、私は民族学にも興味を持っており、柳田国男の『遠野物語』を読んだことがある。その舞台となった遠野の町は、北上山地の中央部に位置し、盛岡のある北上盆地と三陸海岸の間にある。遠野にまつわる神話や伝説、歌謡は私に奥州の空想を更に大きく膨らませるには充分すぎるものであった。そして、奥州の風土を知るには、これ以上のものもこれ以下のものもないと感じ、北国独特の雰囲気、言い換えるとそこにいつも流れている風の匂いを嗅がせてくれた。

このように、私の奥州への空想に、風景や情景といった造形の他に、いつしかそこに住む地霊や精霊といった目にみえない風が吹き荒れるようになった。しかし、これはあくまで本がもたらした私の空想の中での奥州である。現実には、そうでないかもしれない。そこで、奥州という地に実際に足を入れて、現実を見たくなった。風の匂いを嗅ぎたくなった。

奥州への旅の欲望に駆り立てられた時、この欲望にある秩序をもたらしてくれた本があった。司馬遼太郎の『街道をゆく』がそれである。この本には、司馬氏の風土と人間を見つめる思索の旅が綴られていた。彼はこの旅から、「日本とはいかなるものか」という最も日本人として考えるべき、そして、最も日本人として難しい問題にアプローチしていたのである。私は、そのような彼の姿勢に深い感銘を抱いた。実際に、私が旅をする時に、自分に大きな問題を課すようになったのは、この本との出会いがあってからである。また、奥州の風土に深い関心を持ち、そこに暮らす人々の生活や慣習を見てこようと思ったのも、この本との出会いがあってからである。

私は建築を専攻している学生で、以前から奥州の東屋（寄棟、入母屋造）の文化に大変な興味があった。また、奥州藤原氏の平泉文化にもそれと同等のものがあった。そして、これらの現実の興味の中に、私の空想の世界が混在し始めた時、私のかの欲望が爆発して奥州に足を運ばせることとなった。

現実の奥州は、空想のそれとは少し異なるものがあった。奥州を神秘化し過ぎたせいもあるが、かなり土地がなだらかで温和なのである。私が北国の人間で、冬のしばれるほどの寒さに慣れているせいもあるが、2月の終わりなのにそれほど鋭い寒さは感じなかった。また、いろんな人々と話したのだが、表面では非常に明るいのだが、内心には常に西の人々へのコンプレックスがあった。だが、重苦しい灰色の雲の狭間に時より見せる澄んだ青空は、西の地方のそれとは全く異なり、藍色と黄色が秩序のある入り混じりをしていて、大変に美しい。私はスケッチをしながら歩き回るのだが、筆が私の喜びを感じてはしゃいでいたことを思い出すのである。

本は私に空想の世界を沸かせ、その空想の世界は私を思索の旅に導いてくれる。そして、現実にそこに旅した時、沸き上がる感動を倍増させてくれる。私にとっての本とはそういうものなのである。

読書が苦手な人達へ

山口大学医療技術短期大学部　看護学科2年
石　田　光　宏

私は週一回図書館のカウンターでバイトをしている学生ですが、べつに本が大好きというわけではありません。ただ図書館で働くということに少し興味があり、医学部の図書館で働かせてもらって

いるというわけです。普段あまり本を読まないのですが、これを機会に、私が唯一大好きな本、秋元康さんのエッセイについて紹介したいと思います。

秋元康さんといえば誰もが知っている有名な作家です。彼の書いたエッセイだけは、ほとんど読んでいます。彼のエッセイには、自分自身の体験や、恋愛、人生の生き方など、彼の気持ちや考え方がはっきりと書かれていて、考えさせられたりする内容ばかりです。それに彼の本と出会ったのが大学受験前という将来について真剣に悩んでいる時だったので彼の生き方に強い憧れを抱きました。

秋元康さんは学生の頃からその才能を発揮させていました。ある番組に作品を応募したのをきっかけに、彼は作家活動を開始し、数々のヒットをとばし続けていました。その頃の彼の生活は、期待の新人作家として各方面からひっぱりダコで、寝る間も惜しんでペンを握っていたらしいです。そのようなプロとしての生活を続けていた彼は、大きな壁にぶつかってしまいました。毎日締め切りに追われて本当に自分の書きたいことが書けなくなってしまっていたのです。彼は思い悩んだ結果、なにもかも投げ出して海外へ旅立ち、そしてもう一度自分を見つめるために一からやり直すことを決心したのです。彼の書いたあの美空ひばりさんの歌う「川の流れのように」には、そのときの彼の気持ちがとてもよく表れています。

～川の流れのように～

作詞　秋　元　　康

しらずしらず歩いてきた細く長いこの道
ふり返ればはるか遠くふるさとが見える
でこぼこ道やまがりくねった道
地図さえないそれもまた人生
ああ、川の流れのように
ゆるやかにこの身をまかせていたい
ああ　川の流れのように
とめどなく空がたそがれに染まるまで

この歌のようにすべて川の流れのように気ままに生活するのはいいこととはいえません。しかし、時には必要なことです。

今の日本の社会は、何不自由のない生活の質の高い国です。でもその反面、生活にゆとりを持てる時間がだんだん薄れてきているように思えます。親子で公園でキャッチボールをしたり、家族で図書館に行き読書をしたりする人々をあまり見なくなりました。図書館で見かける人といえば、学生やお年寄りばかりのように思えます。私は図書館とは、忙しい毎日での生活の中で、ふと我に返り自分を見つめ直したり、他の世界へ足を踏み入れることで新たな自分を発見できるような、心のゆとりを持てる場所だと思います。

特に今サラリーマンなど、会社でのストレスによる病気が増えてきています。たぶんそのような人達を調べてみると、きっと何年も仕事以外で図書館に入ってないでしょう。

今までいろいろ書いてきましたが、私の生活も毎日忙しく過ぎていきます。バイトか勉強以外で図書館にはもう半年近く行っていません。私は忙しい日が続くと、自分がいやになったり、すべてを投げ出したくなったりすることもあります。そうした時、あの「川の流れのように」の歌を口ずさみ、秋元康さんの話を思い出しています。みなさんも忙しい毎日の生活に疲れたら、秋元康さんの本を読み、夜にでも家でゆっくりと、「川の流れのように」を聞いてみてください。きっと穏やかな気持ちで眠りにつけるでしょう。川の流れのように。

電子図書館　－工学部分館の現状－

現在の、情報化時代にあって国内外の大学図書館では電子図書館システム化のために様々の取り組みをしています。進みゆく情報処理技術をいかに取り込み駆使してゆくか、このことは従来の図書館システムに大きな変革を求められています。

こうした中、工学部分館においてもインターネットのホームページで平成９年度初めより電子ジャーナルへの取り組みをはじめました。

現在は、購入雑誌の内の一部の最新ジャーナルをネットワークで見る事が出来ます。利用条件はジャーナル毎に違いますが、利用者が電子ジャーナルを利用するにあたっては時間・場所に制限がなくなること、発行されているがまだ到着していない最新のジャーナルが見られること、未着・欠号の心配が無い等のメリットがあります。ジャーナルによっては過去数年分をサービスしていますが、多くはその年度発行のものが対象のようです。

また、年々高騰する雑誌経費を可能な限り節約するために、ネットワークを利用して自館のみならず学内の図書館が協力して、重複雑誌をなくせばかなりの節減効果が上げられると言う観点から、今後さらに進展させたいと言う要望を持っています。

しかし、利用者にとって電子ジャーナルそのものに疑問あるいは不安が無いわけではなく、このため平成10年10月の教官会議において、図書館職員によるデモを行いました。

同じく経費節減及び時代のながれから、来年度より山口大学工学部研究報告のインターネット上への掲載とCD-ROM化を目指して実験を行っています。すでに今年度発行されたものについては、インターネット上で公開しています。

その他、研究室等からネットスケープあるいはインターネットエクスプローラを経由して*First Search検索（アメリカのOCLCの提供）サービスを行っています。雑誌論文の所在を検索するだけでなく、一部のデータはその論文の全文を即座に見ることができます。業務用では、*文献複写依頼、*資料購入依頼、*視聴覚室およびグループ閲覧室の利用申請が出来ます。

（http://donald.lib-e.yamaguchi-u.ac.jp/）

また、図書館内においては、情報コンセント（73個）を設置し、利用者が各自のノートパソコンを持ち込み学内LANに接続して利用することが出来るようになっています。

いずれのサービスについても詳しい事は、情報サービス係（内線8016）へお問い合わせ下さい。

（工学部分館　情報サービス係）

本学関係教官寄贈図書

（受入順）

［本館］（平成10年9月～平成10年12月）

守屋　晴雄（経済学部非常勤講師）

・化学商品論序説　守屋晴雄著　中央経済社　1995

石井　　勇（人文学部教授）

・イギリス小説試論：読み手の立場から　石井勇著　旺史社　1998

松吉　定男（経済学部教授）

・企業会計論　松吉定男著　多賀出版　1998

湯川　洋司（人文学部教授）

・陶の里　山口大学人文学部社会情報論コース［編］［1998］
（社会人類学調査実習報告；1997）

亀谷　満朗（農学部教授）

・Joint study of IPM on cruciferous pests in Thailand ／ Mitsuro Kameya & Ratanabhumma ed. The Faculty of Agriculture, Yamaguchi University 1998

[工学部分館]（平成10年９月～平成10年12月）

大原　資生（名誉教授）

・最新耐震工学　大原資生　著　森北出版　1998

山岸　美穂（工学部　非常勤講師）

・日常的世界の研究　山岸健　山岸美穂　共著　慶應義塾大学出版会　1998

トピックス

①　「山口大学附属図書館職員研修会」開催される

山口大学附属図書館では、12月2日に「21世紀の図書館」と題して図書館情報大学森　茜事務局長による講演会を開催した。講演は、メディアの発達と変遷にはじまり、図書館の性格、情報化社会での図書館の役割、電子図書館の最新の情報等詳細な説明があり、21世紀はメディアミックス型情報化社会の到来を迎え、図書館はあらゆる情報のナビゲーターの役目を果たす必要性が述べられた。

当日は、本学関係の出席者は、小嶋総合情報処理センター長、高石事務局長をはじめ、学外からは藤田県立図書館長ほか県内の大学・短大・高専の図書館や、公共図書館からも多数の参加があり、予備席も埋まるほど盛況であった。

②　ニュースレター誌が、全館出そろう

従来から発行されている「YUML-News：医学部分館」「Library Information：工学部分館」に加えて、附属図書館本館からニュースレター誌「**ちょっとお知らせ**」を新たに発行することにしました。

附属図書館では、本誌「Library News」（年３回発行）の速報性を補うため、本館・医学部分館・工学部分館の各館から、不定期に図書館に関する身近な情報を提供して行きます。

各キャンパスの事情に合わせた誌面作りに努め、利用者に親しまれるものにして行きたいと考えています。

人事異動

[辞　　職]（10.9.15）松　本　郁　子　情報サービス課資料サービス係
[採　　用]（10.9.16）宇都宮　麻　衣　情報管理課目録情報係
[採　　用]（10.9.16）田　中　純　子　情報サービス課資料サービス係

日　　誌

[本館]

10.13～14　平成10年度国立大学図書館協議会中国四国地区協議会実務者会議（愛媛）
　藤本資料サービス係長
10.28～30　第39回中国四国地区大学図書館研究集会（島根）
　河本目録情報係員　鳥谷電子情報係員
11.10　新CAT／新ILL説明会（広島）
　江見目録情報係長　松本情報サービス係長
11.11～12　平成10年度中国四国地区国立大学図書館事務部課長会議（岡山）
　矢野事務部長　堀内情報管理課長　小早川情報サービス課長
11.25～26　第11回国立大学図書館協議会シンポジウム（広島）
　小早川情報サービス課長

[医学部分館]

8.20　第４回医学部分館図書委員会
10.22～23　第34回日本医学図書館協会中国・四国部会総会（香川）
　吉光情報管理係長
10.28～30　第39回中国四国地区大学図書館研究集会（島根）
　高田情報管理係員
11.9　第５回医学部分館図書委員会
12.3　第６回医学部分館図書委員会（持ち回り）

[工学部分館]

9.14　第３回　図書・研究報告委員会
9.18　第２回　電子情報対策ワーキング
10.28～30　第39回中国四国地区大学図書館研究集会（島根）
　渡壁情報管理係員
11.25～11.28　Inside Webを使った文献検索講習会
12.2　〃

編集・発行　山口大学附属図書館　広報委員会
〒753－8516　山口市大字吉田１６７７－１　TEL. 0839-33-5185　FAX. 0839-33-5186
E-mail:toshokan@po.cc.yamaguchi-u.ac.jp